２―１１

「このたびは本当に申し訳ありませんでした」

学校の授業を終え、ほかの雑事をすべて片付けた慎は淳の家に謝罪にうかがっていた。淳は検査の結果、大丈夫だという結果が出ていたので、朝一で退院したが、それでも様子見のために今日明日は休むことになった。

「先生、頭を上げてください。先生が悪いわけではないじゃないですか。通り魔だったのでしょう？　ね、だから」

淳の母親は慎の過剰とも取れるほどの深々としたお辞儀に、あせあせしながらやめるように促した。しかし、自身が原因であると思っている慎は「いや、ですが」と、謝罪をなかなかやめようとはしなかった。

「おや、あなたは？」

突然、慎は後ろから話しかけられ、びくりと驚いて振り返った。そこには体つきのいい、しかしそのやさしそうな表情や雰囲気から温和な性格のうかがえる４０後半であろう男

性が立っていた。どこか淳に似ているところがあり、父親だと悟った慎は、「初めまして。私は淳君の担任をやらせていただいております、赤羽と申します。このたびはまことに申し訳ありませんでした」と再び深々とお辞儀し謝罪した。

「ああ、担任の先生でいらっしゃいましたか。これはこれは。淳の父親でございます」

淳の父親は慎に負けないくらい深くお辞儀し、「先生、頭を上げてください。何も先生が悪いわけではないのでしょう？」と告げた。「ですが……」とやはりやめようとしない慎に対し、その目から通り魔事件というのはある程度の虚実が入れ混ざっているなと淳の父親は判断したが、しかし慎の目から同時に誠実さも見受けられることから何か事情があるのだろうと判断したため、「いいんです、先生」と慎の複雑な思いを受け入れることにした。

と、そこへ淳の母親が「あなた、会社は？」と割り込んできた。

「あ、ああ。淳のことが心配でね。部長にいって早引けさせてもらった」

「もう、またそんなことして。淳は大丈夫だったって電話で話したでしょう」
「うー、でもやっぱり心配でさ」
「もう、まったく」
二人のやり取りにぽかん立ち尽くす慎に対し、淳の父親は「あ、先生。立ち話は何ですから中に入ってください」と誘った。
「はあ、しかし」
「実はですね。折り入って先生に話しておきたいことがあるんです」
「……。わかりました」

「どうぞ」
「ありがとうございます」
本当にどこにでもありそうなリビングにて机をはさんで淳の父親に対面して慎は座っていた。母親から差し出された紅茶に一口口をつけ、その味はどこかで飲んだことがあるよ

うな気がするほど普通の味だなと考えながら、そして「それでどのようなお話が」と切り出した。

淳の父親は静かな笑みを崩さず、「先生は今年から先生になられたんですよね？」と聞いてきた。

「はい、そうです」

この質問を聞いた慎は、何か自分にいたらなかったことがあったのだろうと察し、身構えた。しかし帰ってきたのは意外な言葉だった。

「私、先生には感謝しているんです」

「はい……。はい？」

辛い言葉が来ると思っていた慎は、この言葉に理解が一瞬遅れ、「感謝……、ですか」と思わず聞き返してしまった。

「ええ、そうです。最近ね、淳がすごくいい目をするようになったんです。私はね、営業の仕事をしておりまして。とはいっても、向いていないのかなかなか新規のお客さんを取れなくてね、窓際なんですが。まあ、ともかく、営業のお仕事を通して、いろんな人と知り合うことが多かったんですよ」

「はあ」

「当然そうなればいい人ともお付き合いしますし、悪い人ともお付き合いすることになります。そんな中で、いい意味ですごいと思えるような人とも出会うわけなんですよ。今の淳の目はね、彼らの目とおんなじなんです」

紅茶を一口のみ、一瞬の間を空けてから続ける。

「淳はね、聞き分けが本当によくて、誰にでもやさしくて。まあ親ばかだとは理解していますが、とてもいい子なんですよ」

「はい、本当にいい子だと私も思います」

「でもね、やさしすぎるからなのか、すこし弱いところがあるんですよ。なよなよしているというか、頼りがいがないというか。ですが、最近の淳はとても強い目をしている。今までにはなかったことで、私は息子の成長がとってもうれしかった。話を聞くところ、淳はあなたと出会って、そしてかわっていったみたいなんです。詳しいところはなんだかはぐらかされてる感じでしたけどね」

おそらく能力のことだろう、慎は大きくこくりとうなづいた。

「ですが今朝淳とであって、その強さを感じなくなってしまったんです。通り魔に会った、たしかにとても怖いことだったと思います。私もそんな経験をしたら、怖くてたまりません。ですが、それでも淳の心が折れてしまったのなら、私は悲しい」

「……。申し訳ありませんでした」

「いえ、先生を攻めているのではありません。今回のことはただの事故なんですから。でも、淳が強さを失ってしまったのも本当のようなんです。ですから、どうか今までどおり、淳を見守っていてやってはくださらないでしょうか」

そして「勝手なお願いとは承知していますが、どうかよろしくお願いいたします」と慎に深く深く頭を下げた。

「本当は父親である私の役目なのかもしれません。ですが、人が成長するのに大切な師とも呼べる人物は、家族ではないと私は思うのです。実際私では淳に強さを持たせてあげることはできませんでしたし、それに私自身、人生の師としているのは、私が新人のころに出会った、上司でしたから。彼に出会ったからこそ、私の人生は大きく変わりました。ですか

ら、父親の身勝手なお願いかと思いますが、淳をお願いできないでしょうか」

「ですが、私には荷が重いと思うのですが……。事実、私はまだまだ若輩者ですし」

「いえ、そんなことはありません。淳は一度、あなたの元で強い心を持つことができたのですから。いまは、見失ってしまっただけなのだと私は思います。一度は手に入れたはずの心の強さ。淳ならきっと見つけだしてくれると、私は信じています」

「……。分かりました。まだまだ未熟と承知していますが、できることはやります。それが、私の教師としての勤めです」

「ありがとうございます」

淳の父親はまた、深く頭を下げるのだった。

「じゃあな、淳。今日と明日はゆっくりしろよ」

慎が帰るとき、淳は見送りに玄関までやってきていたので、以前雄二が安静にしていなかったことを思い出し、釘を刺し

た。
「はい。お気をつけて」
「ああ」
「先生、今日はお時間を取らせてしまってすみませんでした」
「いえ、別にそんな」
「あ、先生。これ、どうぞもって帰ってください」
「え？　あ、いや、大丈夫です」
「まあまあ、そういわずに。うちの主人、よく出張にいってはお土産をたくさん買ってくるんですよ。このあいだもそれでたくさん買ってきちゃって。うちにあまって大変なんですよ」
「え、ですが」
「お気になさらずに。これ、すごくおいしいんですよ。うちの家内は食べ過ぎて太った太ったいって大変だったんですから。むしろ持っていってもらわないと、また家内が太って大変なことに」
「まあ、あなたったらそんなことといって」

二人のやり取りに、くすりと笑って「わかりました。ではいただいていきます」とお土産を受け取った。そして、お辞儀をして慎は帰路に着く。その様子を見守ってから、淳の父親は淳に語りかける。

「いい先生だな」

「うん。とっても」

「お前も見習っていい人間になれよ。本当の意味でな」

淳は大きくなずき、これに返すのだった。